HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	山本, 順司; 谷地中, 大介; 朝野, 麻衣
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 38
Issue Date	2019-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82856
Type	book
File Information	MuseumNews_38_web.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ISSN 1345-059X
北海道大学 総合博物館

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MuseumNews

北海道大学総合博物館ニュース

ISSUE 38
January 2019
2019年1月発行



CONTENTS

01 夏季企画展示実施報告夏季企画展
「視ることを通して」開催報告
02 北海道胆振東部地震の被害状況について
03 研究紹介(4) 日本海の魚類をこつこつと調べる
04 小林准教授 北海道文化奨励賞受賞
05 「地質の日」記念企画展示
「北海道のジオサイトに見る岩石」
06 常設展示〈収蔵標本の世界〉「科学技術史資料の世界」
07 博物館実習

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM
北海道大学総合博物館

夏期企画展示実施報告

夏季企画展「視ることを通して」開催報告

●2018年8月3日～ 10月28日



企画展示室エントランス

総合博物館では8月3日から10月28日まで2018年度夏季企画展「視ることを通して」を開催しました。共催の放送大学図書館と当館の所蔵資料の中からビジュアル（視覚的）な学術資料を展示し、私たち自身の「視ること」を考え直してみる、という企画でした。大学や研究者の知的営みを紹介し、学術資料アーカイブの可能性を探求することも展示の目的でした。

◉ビジュアルイメージを視る視点：アクリルタグ

私たちの日常を取り巻く画像や映像といった無数のビジュアルイメージは、空気のような存在になっていて、生み出された背景・コンテクスト（制作者や目的など）がかえり見られることは殆どありません。本展で出陳した展示資料は作成時期・作成者・目的もさまざまで、来歴が不明なものも含まれていて、日常空間におけるビジュアルイメージ環境のアナロジーとして考えられる状態でした。そこで、ビジュアルイメージを視る際の視点を示すアクリルタグを導入し、各資料を横繋ぎして見比べながらそれぞれのイメージの特質を探る行為のきっかけにしました。彩り豊かなカラータグは、古い展示品が単なる歴史的存在に沈みこむのも防いでくれたようです。タグは少し馴染みのない概念で、戸惑われたお客様もいらっしゃいましたが、本学および放送大学の学生からなる展示解説ガイドの力で、展示におけるタグの趣旨をお伝えすることができました。


ビジュアルイメージを視るための視点　6色のカラータグ

◉企画展関連イベント：学術映像上映

展示初日の放送大学の来生学長による特別講演をはじめ、複数の関連イベントを実施しました。9月の学術映像特別上映週間は、北海道胆振東部地震のため開催を危ぶみましたが、最終的に計画通り実施することができました。北大研究者が研究用に撮影した映像、北大教員の研究に基づいて制作された新作の科学映像、1960年代の札幌が映された歴史映像、放送大学の人類学映像など様々な映像を来場者のみなさまにご覧いただくことができました。 特別上映週間では、東京シネマ新社の岡田一男さんによる上映トークイベント「北大と学術映像」、第2マルパ会館共催で「再構築的映画表現」などの上映トークイベントを開催し、北大研究者と映像との関わりや映像メディアの構造を検討することができました。10月のイベント「記録すること、伝えること」では、通常未公開の記録映像「坂網猟」伝承編を上映し、今井友樹監督の考える映像記録についてお話をうかがいました。


北側3階吹抜の壁面への映像展示

◉実験映像作家とのコラボレーション

本展では、学術資料の新しい活用を探求するため、二人の実験映像作家に映像展示をしていただきました。普段は倉庫として使用している物品庫内では、大島慶太郎さんが庭園学関係のガラス乾板資料を用いて制作した映像を展示しました。階段吹き抜けの壁面では、研究者撮影の気象学フィルム映像資料と自ら撮影した雲の映像を交互にプロジェクションする映像展示を佐竹真紀さんが行いました。普段使われていない博物館空間で、学術資料アーカイブの新しい見え方をみなさまに楽しんで頂くことができました。8月31日には映像作家の二人と現代美術研究者の浅沼敬子氏（文学研究科准教授）、企画者とのトークイベントを実施し、資料を用いた表現行為の可能性を参加者と議論することができました。

◉学術資料アーカイブの構築のために

本展で実験的に取り組んだカラータグ導入と映像作家とのコラボレーションは、どちらも学術資料の元のコンテクストを反らす手法で資料の新しい見え方と可能性を模索する試みでした。一方、信頼できる学術資料アーカイブには、コンテクストや付帯情報を丁寧かつ体系的に保存する作業も必要です。一見相反する二つの活動ですが、活用可能な信頼できる学術資料アーカイブを構築する両輪だと考えています。展示期間中のトークイベントや、来館された方や協力いただいたみなさまとのコミュニケーションの中で、さらに多くの手がかりを得ることができました。これらを展示報告書にまとめ、学術資料アーカイブの発展につなげたいと考えています。

◉最後に

本展開催に協賛・協力いただいた企業、団体、個人のみなさま、展示制作に尽力いただいたボランティアや学生のみなさまに心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

山下俊介
（研究部助教／映像資料学）


「視ることを通して」展示空間

北海道胆振東部地震の被害状況について



前日の台風21号の記憶も新しい平成30年9月6日深夜3時7分、北海道をいまだかつて無いほどの強い揺れが襲いました。後に「北海道胆振東部地震」と命名されたこの地震は、震源に近い厚真町で北海道では観測史上初めてとなる震度7を記録し、札幌市内でも東区で震度6弱を記録するなど、各地に甚大な被害をもたらしました。

被害は揺れによるものだけにとどまりませんでした。苫東厚真火力発電所が停止した事により、電力の不均衡が起こり、連鎖的に全道の発電所が停止し、北海道は闇に包まれたのです。「ブラックアウト」と呼称されるこの大規模停電は、予想を超えて復旧に数日を要し、被災者は不安な夜を重ねる事となりました。

博物館教員の対応は迅速でした。地震発生後、まだ夜が明けきる前から博物館に駆けつけ、展示及びバックヤードの点検を行った者がいました。電気が絶たれた残暑の蒸し暑い空気の中、活躍したのは貼り紙という原始的な手段でした。情報共有の結果、その日の朝のうちに、博物館の展示物については、幸いにも殆ど損傷が無い事がわかりました。博物館は平成27年からおよそ1年3ヶ月に渡り耐震改修工事のために休館していましたが、その工事が功を奏したかたちです。

しかし、電力の復旧が当面の間見込めないことから、博物館は休館を余儀なくされる事となります。「ブラックアウト」から回復した後も、政府及び大学本部からの節電要請に協力するため、9月14日までは臨時休館、その後は節電要請の目標値変更に合わせて9月21日までは開館時間を10時から12時に遅らせるとともに、館内モニター類の電源を落とした限定開館を行いました。

本来なら客足の伸びる夏季に来館者をお迎えできないことは痛恨の極みでしたが、一日も早い復興を祈りながら、地震の事後処理や展示のブラッシュアップを行いながら雌伏の日々を過ごしたのです。

そうして迎えた9月22日、地震発生後初めての通常開館に踏み切ることができました。幸い好天にも恵まれ、モニター類の明かりも復活した館内は久しぶりに空気まで明るくなったように感じられました。その一方で、来館者の間で交わされる言語はいつになく日本語が多く、外国人観光客の減少を肌でひしひしと感じさせるものでした。館内が地震前のようにワールドワイドな賑わいを取り戻すまでには、まだ一月ほどの時間を要することとなったのです。

博物館の最終的な被害は、ガスクロマトグラフ装置が一台故障して使用できなくなっていました。第2農場においては窯場の煙突の石組みがずれ、モデルバーンの斜交い柱が一つ外れてしまいました。これはおよそ140年のモデルバーンの歴史の中で初めてのことであり、今回の地震による揺れの大きさを物語っていると言えます。また、老朽化により立ち入り禁止となっている函館の水産科学館本館では、多くのひび割れとコンクリートの剥落が認められました。

最後になりますが、今回の地震により被害に遭われた皆様に心よりお見舞い申し上げます。

谷地中大介
（事務部係長）

研究紹介(4)　総合博物館教員の研究紹介として、新たに総合博物館に着任した田城文人助教(魚類分類学)の研究をご紹介します。

日本海の魚類をこつこつと調べる

田城 文人
(研究部助教／魚類分類学)

ある地域に生息する生物をまとめたものを「生物相」と呼びます。大きな枠組みでは、植物をまとめた植物相や、動物をまとめた動物相があり、地域の生物多様性の正確な理解のためにも地道に調べていくことが求められます。今回は、私が専門とする魚類について、中でも、近年力を注いでいる日本海の魚類相研究に関する取り組みを紹介します。

日本列島は、周囲が太平洋、日本海、オホーツク海そして東シナ海に囲まれ、領土面積に対する海洋生物の種多様性がとても高いことが知られています。魚類に限っていえば、約4000種、全世界中の22%以上(全世界で約18000種)が日本に分布することが明らかにされています。私は2018年4月に総合博物館に着任しましたが、それまでの4年間を日本海に面した京都府舞鶴市にある京都大学舞鶴水産実験所で過ごしました。日本海は太平洋に次ぐ大きな海域ですが、その地史や環境構造から、魚類の種多様性は太平洋よりもはるかに低いと言われています。一方、2000年代に入ると、日本海の魚種数が近年増加傾向にあることがいくつかの研究で示唆され、2014年に出版された論文では、1990年の774種から1.8倍(1396種)もの増加が報告されています。しかし、これらの魚類相研究を調べてみると、実体不明な分布記録が多く、現在知られる日本海の魚類相には不確かな点が多いことは明らかでした。そこで、正確な魚類相の解明と多様性変動の適正評価を最終目標に掲げ、その足がかりとして、まずは京都府周辺海域における魚類相を調査することにしました。

実験所の近くには京都府内で漁獲された魚類が毎朝集約される大きな魚市場があり、市場に足繁く通うことで効率的な標本の収集が可能でした。また、実験所が実施した様々な調査・実習において、各種漁業活動では得にくい小型種などを採集することもできました。このような網羅的な標本収集は、実験所の教職員や院生、近郊の水族館や研究機関に加え、漁業・市場関係者や地元の魚屋さんの協力もあって実現に至りました。4年間で集めた京都府周辺産の標本は3300点に達し、そこに実験所の既存標本も加えることで、ようやく京都府周辺海域における魚類相の全体像(550種程度)が見えてきました。これらの中には、日本海での分布がはじめて確認された種が多数含まれ、日本未記録種も認められました。さらに、まだ名前がない未記載種(学名が命名されることで新種)も見つかっています。舞鶴における調査では、種多様性の全容把握に加え、出現種の季節変動や年変動に関するデータ収集を目的として、市場に水揚げされる魚種とその漁獲頻度も月単位で記録しました。真夏の汗が噴き出す日も、真冬の手足が痺れる日もせっせと市場に通っては野帳への記入と証拠写真の撮影を続ける日々でした。こうして蓄積した情報などをもとにして論文を書き上げ(田城ほか, 2017:タクサ42号)、現在知られる日本海魚類相とその多様性変動の考察にみられる問題点を提示することができました。

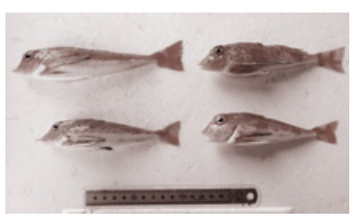
現在、日本海全域を対象とした魚類相研究は私のライフワークの一部に位置づけられています。北海道沿岸の日本海はとくに情報が乏しい海域なので、この先どのような発見があるのか大変楽しみです。



フィールド実習の一環として実施した小型底曳き網調査



マグロ属コシナガの鮮時標本写真。水産対象種の入手には私財を投じることもあります



市場で撮影したホウボウ科カナガシラ属の4種。標本としての保存が困難な場合には写真を記録します

小林准教授
北海道文化奨励賞受賞

平成30年10月29日、ホテル札幌ガーデンパレスにおいて、北海道による北海道文化賞及び北海道文化奨励賞の贈呈式が行われました。これらの賞は、北海道の文化の向上発達に関し、その功績の特に顕著な個人・団体を顕彰するものです。今回は、北海道大学総合博物館の小林快次准教授が、自然科学の発展に貢献したとして、北海道文化奨励賞を高橋はるみ知事より贈呈されました。今回の受賞は、北海道及び北海道大学を恐竜研究の拠点とすることに成功し、全国全世界に情報発信していること、及びむかわ町穂別から発見された「むかわ竜」を通して北海道の文化普及振興に貢献したことが評価されてのものです。贈呈式では、むかわ町竹中喜之町長に同伴していただき、また会場には、北海道大学西井準治理事、総合博物館の大原昌宏教授と湯浅万紀子教授、むかわ町教育長やむかわ町穂別博物館館長、むかわ町民の方々にも参加していただきました。

文化奨励賞は、10年以上の貢献をした人に与えられるものです。受賞者挨拶で小林准教授は、「この賞は、私個人ではなく、『むかわ竜』に与えられた賞です。私は13年前に北海道大学に着任しました。その間、北海道大学及び北海道大学総合博物館には、全面的なサポートをもらいながら恐竜研究者として育てていただいたことに感謝いたします。また、『むかわ竜』に関わってから6年が経ちました。むかわ町の方々の力強い協力によって、『むかわ竜』はむかわ町の宝、北海道の宝、日本の宝、そして世界の宝として世の中に知れ渡るようになりました。むかわ町の方々のおかげで、北海道の恐竜文化を確立し発展させることができ、皆様には深く感謝申し上げます」と述べていました。さらに「むかわ町の復旧復興はまだまだです。今、『むかわ竜』を復興のシンボルの一つとし、町民の方々は復興に向けて一生懸命頑張っているところです。今後も、北海道大学はむかわ町に対して全面的なサポートをし、さらなる発展に向けて頑張っていきたいです」と語りました。



贈呈式での小林准教授(中央)、竹中喜之むかわ町長(左)、西井準治理事(右)

藤原ナチュラルヒストリー振興財団
公開シンポジウム

「恐竜と鳥のはざま」

●2018年10月14日



10月14日、公益財団法人　藤原ナチュラルヒストリー振興財団と総合博物館の主催の、公開シンポジウム「恐竜と鳥のはざま」が開催されました。藤原ナチュラルヒストリー財団は通常、東京で公開シンポジウムを開催していましたが、今回は東京以外では兵庫に続き2度目の開催で、札幌・北海道大学理学部大講堂で行われました。

当日は、217名の参加者があり、人気の恐竜学最前線の話題が聞ける良い機会のため、中学・高校生も多く参加していました。

講演内容は以下の通りです。

森本 元(山階鳥類研究所):
鳥の色・恐竜の色〜なぜ恐竜の色を現代の鳥類の発色から検討できるのか〜

千葉謙太郎(岡山理科大学):
恐竜の派手な見た目は何のため?
鳥の雌雄差から考える恐竜の進化

田中公教(兵庫県立人と自然の博物館):
海をめざした恐竜時代の鳥類

田中康平(名古屋大学博物館):
卵化石から探る恐竜の巣作り

江田眞毅(北海道大学総合博物館):
分子生物学から恐竜を探る!?

小林快次(北海道大学総合博物館):
鳥の特徴を持つ鳥じゃない恐竜たち

シンポジウム後は、藤原ナチュラルヒストリー財団関係者との懇親会もあり、自然史学の錚々たる理事の先生方と貴重な意見交換ができました。また総合博物館の展示や教育普及活動を理事の方々に見ていただくことができ、北大総合博物館を理解していただく良い機会となりました。この場を借りて、藤原ナチュラルヒストリー財団の皆様に厚く御礼申し上げます。

大原昌宏
(研究部教授／昆虫体系学)

「地質の日」記念企画展示

「北海道のジオサイトに見る岩石」

●2018年4月27日～ 6月17日



今年で11回目となる5月10日の「地質の日」を記念する標記企画展示が、4月27日（金）～6月17日（日）に当館1階展示室で開催されました。主催は「地質の日」記念展実行委員会・北海道大学総合博物館、共催は日本地質学会北海道支部・産総研地質調査総合センター・道総研地質研究所・北海道博物館・札幌市博物館活動センター・北海道地質調査業協会で した。北海道教育委員会・札幌市教育委員会に後援をいただき、NPO法人北海道総合地質学研究センターの協力をいただきました。

最近は「ジオパーク geopark」という言葉が広く知られ、道内には世界ジオパークが2か所、日本ジオパークが3か所あります。「ジオサイト geosite」も地球や大地（geo）の永年の営みや活動の痕跡が地表に現れているところ（site）で、地球科学的に特に貴重な事物（地形・地質・岩石・鉱物・化石など）や現象（断層・褶曲・堆積構造など）が観察できる特徴的な場所（自然遺産）のことです。日本地質学会北海道支部では「北海道地質百選」（http://www.geosites-hokkaido.org）を紹介していますが、本展示では、そのようなジオサイトの中から岩石や鉱物に関わるジオサイトの見どころをポスターや当総合博物館などに収蔵されている岩石・鉱物標本を展示して紹介しました。皆さんを北海道の自然の生い立ちを楽しく学ぶことのできるフィールドへお誘いすることができたと思います。

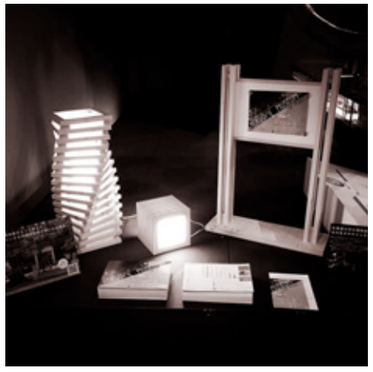
関連イベントとして、中川 充氏（産総研北海道センター）による「北海道の石！ 砂白金」および松田義章氏（NPO法人北海道総合地質学研究センター）による「北海道における地質学の調査・研究の事始め～北海道命名150年によせて～」の市民セミナーが当館「知の交流コーナー」で開催されました。ともに80名を超える盛会でした。また市民地質巡検（ジオサイト「藻岩山」を歩く）が岡村 聡氏（北海道教育大学）・宮坂省吾（NPO法人北海道総合地質学研究センター）の案内で行われ、市民21名が参加しました。

在田一則
（ボランティア）

総合博物館にいざなう灯火 ～誘導灯設置プロジェクト～

当館には誘導灯がありません。冬になると閉館の午後5時を待たずに日が没し、来館者の皆さまを暗闇に送り出す日々が続きます。2016年、より愛される博物館になることを標榜してリニューアルオープンを果たした当館にとって、この状況は長く憂慮される事態でした。

そこで2018年に中川館長を委員長とし、学内の教職員や学生、道内企業の参画を得た「北海道大学総合博物館前庭活性化プロジェクト実行委員会」を立ち上げ、誘導灯の設置に乗り出しました。当館の新たな顔となる灯に相応しい意匠は何なのか、工学研究院建築デザイン学研究室の協力によって、所属学生の設計案が多数提案されました。この度の誘導灯には積雪時にも機能を保つ仕様が要求されます。この基準で3案が選り抜かれ、中川研究林のトドマツを用いた木製の誘導灯に仕上げることが決まりました。しかし、当然ながら開発には資金が必要です。そこで、商品開発に関する資金調達に強みがあるクラウドファンディング会社Makuakeをプラットフォームに開発資金300万円を募るプロジェクトに挑戦しました。その結果、2018年7月20日から10月30日までのおよそ3ヶ月間に160万円を越える支援をいただくことができました。目標額には達していませんが、支援金を使わせていただき、実物大の試作品やミニチュア版誘導灯（写真）を開発することができました。しかし、誘導灯を展開するにはまだ資金が必要であるため、当委員会では引き続き開発資金を募っています。皆さまからのお力添えをどうぞよろしくお願いいたします。



ミニチュア版誘導灯

プロジェクト詳細 ▶▶▶

引き続きご支援をお願いいたします。

山本順司
（研究部准教授／地球科学）

常設展示
収蔵標本の世界

3階常設展示「収蔵標本の世界」では、総合博物館が所蔵する300万点を超える標本の一部を展示しています。前号に引き続き、展示室毎に取り上げ、紹介してまいります。

科学技術史資料の世界

北海道大学総合博物館では、標本や文化史の収蔵品のほか、科学技術に関わる機器資料や文書等の記録資料も収蔵しています。北海道大学の教育研究の現場で用いられ、生み出されてきた資料群で、その一部を「科学技術史資料の世界」として展示しています。

当館3階の北側階段を降りる手前から、5つのセクションからなる展示がはじまります。まず、上皿天秤や高度計、風速計などからなる「はかる」セクションです。研究者が物事を科学的に扱う際、はかる（計測する）行為がその礎になります。多くの方が目をとめる茶色い円筒状の機器、理学部陸水学研究室で用いられていた雨量計も展示しています。このセクションではさまざまな機器・道具類から「はかる」行為の広がりをご覧いただいています。

次に、顕微鏡群からなる「みる」セクションが続きます。当初は「顕微鏡の森」と見立てましたが、まだ木立状態かもしれません。顕微鏡は、研究者の「みる」行為を拡張してきた科学機器の代表です。ドイツから輸入されたライツ製の顕微鏡から、国産化に成功した島津製作所製の顕微鏡、その後の発展、といった時間的な流れと、解剖用顕微鏡、生物顕微鏡、偏光顕微鏡といった目的別で形状の異なる区分けで展示しています。展示キャプションでは製造時期などを示していますが、顕微鏡の機能的形状や意匠（単眼か双眼か、ステージや鏡台の形など）を見比べることでも、時代的な並びや用途分類が可能であることを体感していただきたいと考えています。実際の資料整理作業でも、他の大学や研究機関が所蔵していて、台帳などから購入年の判明している類似の顕微鏡と見比べることで、時期や目的等を推定することもあります。



「みる」セクションの顕微鏡群

「研究者の道具」セクションでは、研究者が書く（描く）ことや計算に用いた比較的身近な道具や機器を時代に沿って展示しています。計算尺から機械式の計算機、電子卓上計算機という計算機の流れと、紙とペン、あるいはレタリングセットや真弧（まこ）、タイプライター、ワードプロセッサという文書・描画作成機能の流れの2つがパーソナルコンピューターに集約していく様子が分かります。販売された製品であっても、研究者が実際に用いた点が当館所蔵資料の特徴です。

2階には「ある研究室から」セクションを設け、医学部生理学第二講座初代教授の朴澤進教授が使用した機器類を展示しています。この朴澤コレクションには機器だけではなく、実験ノートや機器カタログなどもまとまった形で残されており、それらを相互に突き合わせることで、当時の研究者の研究目的や実験機器の精度などを科学技術史的に検討することができます。

科学技術史資料を収集・保存する意味はどこにあるのでしょうか。ある一人の研究者を対象にしたとしても、日夜進められる学術活動の全貌をとらえることは困難です。また、ある時期に大学全体でどのような種類の研究が活発であったのかを横断的にとらえることも不可能でしょう。科学機器や関連資料・情報を数多く収集・保存することで、不可視の学術活動にアプローチすることができます。資料群をもとにして、科学技術の進展に寄与した技術、分野を越え広く用いられた手法や装置などを明らかにし、その先に学術活動の意味を考えることが可能になります。当館の科学技術史資料は、まだ十分な収蔵スペースを持っていませんが、資料の魅力と潜在力を発信して本学のコレクションを整備していきたいと考えています。

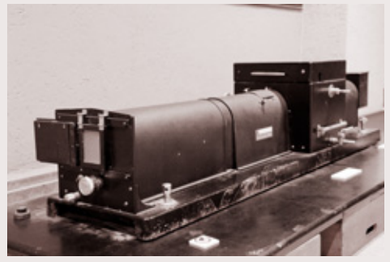
山下俊介
（研究部助教／映像資料学）



測風経緯儀（左）と雨量計（右）「はかる」セクション



展示セクション「ある研究室から―生理学第二講座朴澤コレクション」



現存する国内最初期の電気泳動装置 チセリウス式電気泳動装置 HT-B型

博物館実習

●2018年9月4 ～ 5・7・10 ～ 13日



箱から資料を取り出して整理する第2農場班



展示の修復を終えた映像班

総合博物館では、本学学生を対象にした学芸員実習を実施しています。学芸員養成課程のさまざまな科目を受講した後に、博物館の現場で実務を学ぶ科目として位置づけられています。実習期間中に北海道胆振東部地震に見舞われたため、例年より1日短い7日間、午前中に演習、午後に第2農場、映像・科学技術史資料、植物、地学・古生物の4班に分かれての実習を行いました。短期間では博物館活動の全てを習得するには限界があること、班メンバーの専門レベルに偏りがないこと、所属する研究室では体験できない実習に取り組んでほしいことから、各自の専門分野以外の班に配属された学部4年生から博士後期課程3年生まで専門分野も異なる16名が、停電の1日も含めて全日程に熱心に取り組みました。

午前中の演習では、中川光弘館長による講義をはじめ、当館の教員全員が各自の研究と教育、博物館活動について紹介しました。博物館事務係の谷地中大介係長による博物館運営や事務業務の説明、研究支援推進員の高橋一葉さんと植松淳子さんによる館内サインのパネル製作実習も行われました。

第2農場班では、近藤誠司研究員の指導のもと、施設見学を通してその歴史や役割を理解した後、25箱の未整理資料を整理しました。畜産学関連書籍、牛乳払下日記帳、物品出納簿、血統表・血統証明書、日誌など1880年代から1990年代までの500点余りの資料の埃を払い、冊子とそれ以外の資料を区別して整理し、基本情報にコメントも加えたデータベースを作成しました。作業の大変さを実感したと同時に、未整理の資料を点検して当時の様子を読み解いていく面白さも実感しました。

映像・科学技術史資料班では、山下俊介助教と杉山滋郎研究員、湯浅万紀子教授から、科学技術史資料の目録作成・保管方法について学びました。実習の様子を映像で記録することも心がけ、収蔵庫見学の他、映像フィルムの劣化診断、展示物の修復作業、企画展示グッズのシルクスクリーン印刷実習、科学技術史資料の整理といった多岐にわたる作業を行いました。資料情報を正確に記録して誰にでも分かるように整理することの意義や面白さを痛感し、また、自ら活動しながらそのプロセスを記録することの難しさも実感した実習となりました。

植物班では、髙橋英樹特任教授担当の陸上植物分野では、収蔵庫見学の後、構内で植物を採取し、乾燥させてから図鑑や関連書籍、博物館収蔵標本を参照して同定し、ラベルを作成して台紙に標本をマウンティングする作業を行いました。阿部剛史講師担当の海藻分野でも標本を作製し、博物館3階の「生物の部屋」廊下の壁のハンズオン展示としてレイアウトしました。また、海藻標本の栞も作成し、他班の実習生に配布しました。未整理標本が大量にあり、収蔵庫が不足していることも実感しました。

地学・古生物班では、収蔵庫見学の他、山本順司准教授から地球体感教材や関連展示の制作の実際、博物館活動を支えるさまざまな技術について学んだ他、屋外でのマグマ作成の実験も行いました。古生物分野では、越前谷宏紀研究員から当該分野の研究・展示制作について学び、3階展示室「古生物の部屋」の既存展示について、来館者の視点をより意識して標本の配置やパネルをブラッシュアップさせました。

最終日の各班の報告会での意見交換や事後レポートからは、実習生達が、資料の保存・調査・研究・展示制作についての知識を深め、さらに博物館の諸活動に込めた教職員の思いを理解したことがうかがえます。

湯浅万紀子
（研究部教授／博物館教育学）



海藻標本のハンズオン展示を準備する植物班



既存展示をブラッシュアップした地学・古生物班

博物館の建物に注目した学生企画ワークショップを開催

●2018年7月13日・22日





夏休み目前の7月に、学生企画ワークショップ『めぐる建物 感じる歴史 みんなのまなざし再発見』が開催されました。本企画は学生が博物館に関連した企画の立案、運営、評価に取り組む理学院専門科目「博物館コミュニケーション特論Ⅰ」の一環として開催されました。大学院共通科目・ミュージアムマイスター認定科目でもあり、様々な専攻や学部に所属する11名が受講しました。

本企画では総合博物館の建物そのものを「最大の展示物」として捉え、建築様式や意匠などに見られる＜建物＞の魅力、そして総合博物館の沿革や建物が理学部として使われていた時代の卒業生からヒアリングした思い出といった＜歴史＞の魅力を参加者にお伝えしました。企画を通し参加者に総合博物館の新たな魅力を発見していただき、再訪していただくこと、そして建物への関心を高めていただくことを目的とした2時間の企画でした。

企画の最初にはスライドで企画と建物の概要を説明し、次に少人数のグループに分かれてそれぞれ学生2名が担当する館内ツアーに出発。玄関、中央階段、アインシュタインドーム、3階の階段教室、普段は非公開の博物館の応接室と理学部の大会議室の他、廊下や天井、そして階段にも解説ポイントを設け、館内をめぐりながら魅力をお伝えしました。「今は昆虫標本の収蔵室として使われているこの部屋は、旧理学部時代には図書室でとても充実していたそうです」など歴史ある建物ならではのエピソードを紹介したり、「踊り場には『寄木張り』という技法が使われています」など普段注目されることの少ないであろう建物の見どころを分かりやすく解説したりしました。

その後参加者には気に入った場所や新たな気づきを写真に収めていただき、最後に1階ラウンジで飲み物を片手に写真を囲み、和やかな雰囲気の中で写真に込めた思いや気づきを共有する時間が持たれました。

参加者からは「何度も博物館を訪れていますが、新たな発見がありました」（50代男性）、「参加したことで、建物ももう少し見てみようと思えました」（20代女性）といった感想が寄せられました。本企画により総合博物館の建物と歴史の魅力を再発見し、参加者にお伝えすることができました。

担当学生： 安藤瑞帆・雲中慧・鈴木花・濱崎瑠菜・山本茉奈（理学院）、大西克弥・押野祐大・渡辺爽（生命科学院）、近藤喜十郎・野瀬紹未（文学研究科）、遠藤優（理学部）
協力教員： 池上重康（工学院・総合博物館資料部）
担当教員： 湯浅万紀子（総合博物館）

雲中 慧
（理学院修士1年）

博物館における北海道大学初任事務職員実地研修

本学の2018年度初任事務職員22名の人材育成の一環として、総合博物館での実地研修が実施されました。本研修では、初任事務職員が、来館者への本学の歴史と現在についての説明や展示室での案内といった実務体験を通じて、本学への理解と知識をより深め、職員としての意識を高めるとともに、コミュニケーション能力を身に付けることを目指しました。

研修生は事前に湯浅万紀子教授から博物館の使命や役割、来館者対応についての講義と見学案内を受け、さらに各自が予習を重ねた後、数名のグループに分かれて8月上旬に1時間30分の実地研修に臨みました。当日は見学者へのガイダンスや展示室での案内、リーフレットの配布、アンケートの回答依頼などを行いました。研修報告書からは、本学と博物館への多くの市民の関心の高さを実感し、市民との交流の意義を理解したことがうかがえました。

湯浅万紀子
（研究部教授／博物館教育学）



展示室で案内する初任職員

「視ることを通して」の展示解説を担当して

●2018年8月3日～ 10月28日

ミュージアムマイスターコースの一環として、私たち北海道大学の学生6名と放送大学の学生は、企画展「視ることを通して」の展示解説員を務めました。事前に企画展示担当教員の山下俊介先生と展示解説担当教員の湯浅万紀子先生から、展示の概要や解説時の振る舞い等について指導を受け、全8回の解説に臨みました。私にとってビジュアル資料は未知の研究分野でした。しかし、ビジュアル資料を通して伝えられる制作当時の社会背景や記録された人々の営みは大変興味深く、準備や解説を行っていく中でビジュアル資料への知識を深める事ができました。解説時に頂いた質問は回答と共に解説員間で共有しました。また、各回の解説終了後には教員へレポートを提出してアドバイスを頂き、次の対応へと活かしていきました。



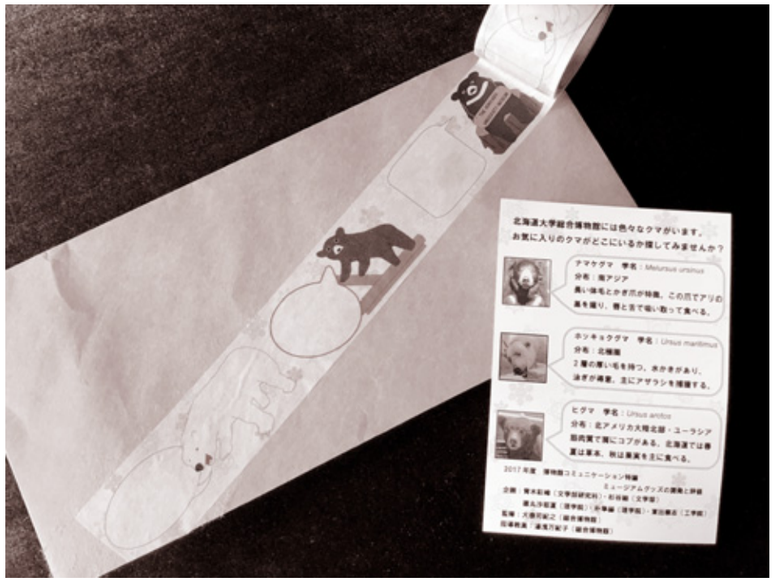
展示室で解説を行うと、こちらから話をするだけでなく、来館者からお話を聞く機会も多くありました。海外の方や札幌在住の方、子供からお年寄りといった多様な来館者との対話を通して、展示を見て抱いた感想やガラス乾板で撮影した家族写真の思い出などを聞かせて頂いた事で、博物館は学びの場であると共に、様々な背景を持つ人や物が出会う場所でもあるという事を改めて実感しました。このような対話の中で私自身も多くの事を学び、より広い視点で物と人との関わりを見る事ができるようになりました。今後も展示解説で学んだことを活かして、博物館活動に携わっていきたいです。

マイスター認定コース学生： 遠藤優、大村颯、上村麻里恵、川名桃子、酒井涼香、沼前広一郎

川名桃子
（薬学部5年）

学生企画ミュージアムグッズ

「Museum クマスキングテープ」



3体のクマに吹き出しが付いたポップなデザイン

2017年度の大学院共通科目「博物館コミュニケーション特論Ⅲ　ミュージアムグッズの企画・開発・評価」の受講生4名が総合博物館オリジナルのグッズ「Museum クマスキングテープ」を開発しました。授業において、マーケティング調査を行い、検討を重ねた結果、お土産として渡すことで購入者と周りの人との新しいコミュニケーションのきっかけになるような、総合博物館らしさがあふれるユニークなデザインの日常的に使用できるグッズを開発することが決まりました。

今回制作した「クマスキングテープ」には、総合博物館内に展示されているホッキョクグマ・ナマケグマ・ヒグマの3体の剥製のイラストが描かれています。また、市販されている多くのマスキングテープより縦幅を広くし、一体ずつが話しているような吹き出しを描くことで、テープとしてだけでなく、簡単なメモを書いて使うことができるように工夫しました。背景にはカラフルな雪の結晶をちりばめ、ポップなデザインとなっています。グッズには、博物館の教員による監修を受けて学生が執筆した解説書が付いています。現在「ミュージアムショップ　ぽとろ」で販売中です。見かけた際はぜひお手に取ってくださると嬉しいです。そして、総合博物館内のどこにデザインされた3体のクマがいるのか探してみてください。なお、この授業から他のグッズも実現予定です。

担当学生： 青木彩峰（文学研究科）・杉谷紬（文学部）・徳丸沙耶夏（理学院）・東出崇志（工学院）
監修： 大泰司紀之（総合博物館）
指導教員： 湯浅万紀子（総合博物館）

徳丸沙耶夏
（理学院修士2年）



担当した4名の学生

北大エコキャンパス観察会 ― サクシュコトニ川沿いの遺跡・花・虫 ―

●2018年6月23日

1972年6月に開催された国連人間環境会議を記念して、日本では6月が環境月間に指定されており、全国で環境の保全に関する普及・啓発のため各種行事が開催されています。去年に続き今年も「北大エコキャンパス観察会 ― サクシュコトニ川沿いの遺跡・花・虫 ― 」を6月23日（土）に開催しました。



子どもも夢中になっていた観察会

当日は陽射しが強すぎず時折さわやかな風が吹く、天候に恵まれた観察会日和となりました。子どもを含む45名もの参加者の中には、わざわざ函館からいらした考古学好きなご家族や、観察会を行なっている様子を見て飛び入り参加される学生もいらっしゃいました。道すがら、高橋英樹特任教授（植物体系学）、大原昌宏教授（昆虫体系学）、江田真毅講師（動物考古学）の3名から、樹木の葉の観察の仕方や昆虫の名前と生態、遺跡の形状と当時（続縄文時代）の暮らしについてなどの説明を受けました。落ちている樹皮や草むらで捕まえた昆虫を先生に見せに来るお子さんや、先生の突然の質問に対し大人顔負けの解答を連発するお子さんがその場を盛り上げてくれていました。博物館前を出発し、人文・社会科学総合教育研究棟やメインストリート、クラーク像付近、サクシュコトニ川沿い、工学部裏、遺跡保存庭園を通っていくという、個人の気軽な散歩コースにはならないであろうコースに、皆さんは十分満足されていたようでした。身近な自然を大切にしていきたいという想いを強く持たれたのではないでしょうか。

植松淳子
（研究支援推進員）

カルチャーナイト2018　星空とチェンバロの夕べ

●2018年7月20日



満席のチェンバロ&リコーダー演奏会



望遠鏡で夜空を眺める地域の方々

札幌市の公共施設や文化施設、民間施設が夜間開放し、市民に地域の文化を楽しんでいただくカルチャーナイトが2003年から開催されています。総合博物館は2004年から参加しており、市民グループの札幌星仲間と当館のボランティアにご協力いただき、今年は「星空とチェンバロの夕べ」をテーマに特別プログラムを実施しました。

知の交流ホールではチェンバロ&リコーダー演奏会が行われ、夜や星に関連した曲を中心に7曲披露されました。宇宙の4D シアターでは「中国は擬人化がお好き!?」と題し、北斗七星と南斗六星という中国で対となって神格化されている星座を紹介しました。ときおり中国語も交えながら、一時の宇宙旅行を体験していただきました。さらに、2階「感じる展示室」ではワークショップが開かれ、岩石類を実際に触れていただくことで視覚だけではなく触覚や聴覚なども使って標本を感じていただきました。

また、札幌星仲間のご協力により、博物館前に大小さまざまな望遠鏡が設置され、星空観察会が行われました。空が暗くなるにつれて薄い雲がかかり始めましたが、月や木星、土星を見られるとあって、あちらこちらで行列ができるほどの賑わいでした。

高橋一葉
（研究支援推進員）

「エルムの杜の宝もの」―道新ぶんぶんクラブとの共催講座を開催



第1回の講座（写真提供：道新ぶんぶんクラブ）

総合博物館では2009年度から北海道新聞ぶんぶんクラブとの共催講座「エルムの杜の宝もの」を開催しています。道新ぶんぶんクラブ会員を対象にした講座であり、北海道大学の研究を知っていただく機会になっています。2018年度は5月に、北大の海藻研究の礎を築いた宮部金吾の研究を解説し、身近な海藻類に関する研究の面白さも紹介する講義を行いました。6月には札幌農学校第2農場見学会を開催し、少人数に分かれて講師と第2農場ボランティアによる解説ツアーを実施しました。7月には夏季企画展示「視ることを通して」と館内全体の解説ツアーを行いました。毎回、多くの方が熱心に参加され、展示解説ボランティアの協力により運営されました。

5月26日　宮部金吾が築いた北大の海藻研究
阿部剛史（海藻分類学）

6月30日　札幌農学校第2農場見学ツアー
近藤誠司（家畜生産学）

7月29日　夏季企画展示「視ることを通して」・常設展示の見学
山下俊介（映像資料学）・湯浅万紀子（博物館教育学）

湯浅万紀子
（研究部教授／博物館教育学）

ホームカミングデー 展示解説＋映像提供

●2018年9月29日





秋晴れの中、総合博物館ではホームカミングデー2018に関連して二つのイベントが行われました。

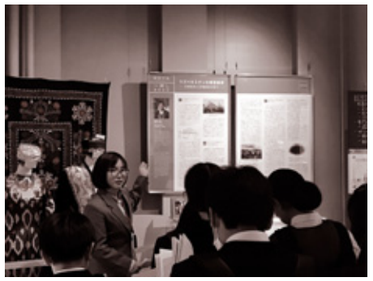
開催中の総合博物館夏季企画展「視ることを通して」では、展示解説を展示企画者の山下俊介同館助教が行いました。北海道大学総合博物館が所蔵するビジュアル学術資料「ガラス乾板」「気象学関係映像」「水産学関係教育掛図」「八木健三スケッチブック」の各コレクションに加え、共催の放送大学「百科全書」「北海道古写真」「ちりめん本」コレクションなどの展示資料を紹介し、時期や目的、メディアの異なる様々な資料を比較しながら見るための展示の仕掛けや、ビジュアル学術資料の可能性について解説しました。学術資料を通して、ふだん見ることのできない研究者の知的営みや人となりがうかがえることも参加者の関心を惹いたようでした。参加者からは、大学博物館ならではの展示や博物館活動に期待する声も寄せられました。

一方、“博物館を楽しむ”をモットーに北大生が提案・企画・運営している北大ミュージアムクラブMouseionが、常設展の展示解説を行いました。今回は、2017年のイグ・ノーベル賞受賞で話題となったトリカヘチャタテや、標本をくるんでいた明治以降の新聞紙とそれらを保存する博物館ボランティアの活動について、学生が独自にシナリオを作成し、練習を重ねてこの日を迎えました。参加者からは質問だけではなく、知識や経験に基づく貴重な情報を教えていただく場面もあり、学生にとってもホームカミングデーでの交流は貴重な経験になったようです。

谷地中大介
（事務部係長）

北大生による展示解説

北大ミュージアムクラブMouseionは北大生が博物館を中心に活動するサークルです。主に北大のイベントの時期に展示解説をしています。本記事では、北大祭、オープンキャンパス、ホームカミングデーに行った展示解説の様子について報告します。解説担当学生とテーマは文末に記します。


北大祭での経済学部展示に関連した解説

北大祭ではMouseionの一年生メンバーが初めて上級生の解説をサポートしました。これをきっかけに解説の流れをつかんで、今後自身が解説を行う際に活かしてほしいと思います。

オープンキャンパスでは中高生と、そのご父兄が多くご参加下さり、北大で行われている研究の解説を熱心に聞いて下さいました。解説後も受験勉強や大学生活についてご質問いただき、普段と違う雰囲気のなかで来館者の方々と交流できました。


オープンキャンパスでの新聞紙展示とボランティア活動に関連した解説

ホームカミングデーでも、卒業生を含めた来館者の方々が解説後に感想を語って下さったり、解説の内容に関する体験談を聞かせて下さったり、意見交換でき、有意義な時間を過ごせました。

このように博物館という場所で市民の方と交流する機会は、普段の学生生活ではなかなか巡り合えないため、Mouseionの活動に取り組んでいてよかったなと感じます。また、オープンキャンパスとホームカミングデーの展示解説では、北海道新聞の取材を受けました。展示解説の様子のほか、解説準備の様子などサークルの普段の活動も記事にして下さるそうです。これをきっかけにMouseionをより多くの方に知っていただき、活動が盛り上がるきっかけになればよいと考えています。

［解説担当学生とテーマ］

◉6月1日～ 3日　北大祭

吉崎千真（法学部3年）「電波望遠鏡を用いた宇宙観測」

黒岩杏佳（農学物3年）「経済ってなんだろう？ ～色々なカタチを知る～」

漆原まりあ（農学部3年）「時代のタイムカプセル　新聞紙の世界＆博物館ボランティア活動の一端紹介」

岡田真歩（理学部2年）「〇〇逆転昆虫『トリカヘチャタテ』」

◉8月5日～ 6日　オープンキャンパス

黒岩杏佳「同上」

漆原まりあ「同上」

谷口諒（理学部3年）「北大にゆかりのある古生物＋α」

◉9月29日　ホームカミングデー

漆原まりあ「同上」

岡田真歩「同上」


ホームカミングデーでの昆虫の展示に関連した解説

漆原まりあ
（農学部3年）

構内の人とものを活かした庭づくり




みなさんは博物館に中庭があることをご存知でしょうか。博物館は改修工事を終え、カフェやイベントスペースが整備されるなど、地域の活動拠点としての役割を担うようになりました。中庭でも博物館に足を運んだ際に憩いの場となることを願ってボランティア活動が始まっています。

最初に中庭に入った時は、植物が自由に生い茂り、どこから手を付けていいのかわからない状態でした。まずは観察ということで庭の一年間の姿を見ていくと、季節ごとに表れる様々な植物の姿があり、ここの植物を活かす可能性を見出しました。

ただ、実際の作業は、移植や廃棄物の処理といった土壌の整備をしつつ、風通しが悪くならないように除草をするという地味なものでした。自然に触れることを楽しめる学生が中心となることで、多くの方々の協力を得ながら少しずつ作業を続けてこられました。活動2年目にして、その成果が芽生え始めています。

その一つがウッドチップです。人が歩けるように今年の春から梅の木を囲うようなコースに敷きました。このチップは農学部森林学科の玉井裕先生のご協力により、構内で伐採した木の枝をチップ状に砕いたものです。また、建築学科の学生メンバーを中心にウッドデッキも製作中です。実はこれらの材料も構内で使われなくなったものを使っています。来年の春に完成予定です。これからも身近な人やものの価値を見つけ、それらを組み合わせて、来館される方々の居場所づくりをしていきたいと思います。

星野愛花里
（ボランティア）

金曜ナイトセミナー＆コンサート




総合博物館は、6月から10月まで金曜日は夜9時までの夜間開館を行なっています。その周知普及のため、金曜日にセミナーとコンサートを開催してきました。平成30年度は計8回を開催することができました。特にセミナーは、キャンパスマスタープラン（CMP）委員会の先生方にご協力をいただきました。講演者・出演者の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

セミナー・コンサートの内容は以下の通りです。

6月22日（金）　ブルーグラス・コンサート
7月6日（金）　ブルーグラス・コンサート
7月27日（金）　オーケストラ・コンサート
8月10日（金）　ナイトコンサート・邦楽の夕べ
8月24日（金）　ポプラチェンバロ・コンサート「月夜に愉しむトークと音楽」

◉CMPセミナー（1～3回）

8月3日（金）　「北海道大学のみどりの効用と緑地管理」近藤哲也教授・北海道大学農学研究院
8月31日（金）　「キャンパスの蛾類について」櫻井正俊氏・北海道大学総合博物館ボランティア
9月21日（金）　リカレントプログラム「ミュージアム学芸員の企画展制作〈立案・運営・評価〉」
共催「“場”をつくること―くみたて和室の開発と実践を通じて―」小澤丈夫教授北海道大学大学院工学研究院

大原昌宏
（研究部教授／昆虫体系学）

ポプラチェンバロコンサート

●2018年6月17日



去る6月17日(日)に行われたポプラチェンバロコンサートのご報告です。

毎週水曜日に行われているミニコンサートでは、独奏曲を中心にチェンバロの音色を単独で楽しんでいただくことが多いですが、週末などには、他の楽器や歌の入った拡大版のコンサートを行っております。

今回は、バロック・ヴァイオリンとヴィオラ・ダ・ガンバという弦楽器とともに、イタリア、ドイツの曲を中心に演奏いたしました。チェンバロには色々な様式があるのですが、博物館のポプラチェンバロは「イタリアン」という様式です。コンパクトな作りでパキパキした音色が特徴ですが、演奏した曲はこの様式の楽器に合う曲が多く、特にヴァイオリン・ソナタなどのイタリアの古めの時代(17世紀はじめ頃)の曲には、ポプラチェンバロの音色はまさにピッタリでした!当日は、お天気ももってくれて、たくさんのお客様にご来場いただき、終演後にはチェンバロを取り囲む人の山で、その人気ぶりが伺えました。

チェンバロは、独奏曲の他にも様々な楽器の伴奏にも使われており、その独特の音色は、他の楽器と合奏することで、また違った形で楽しむことができます。

今後も、色々な形でチェンバロの音色を楽しんでいただけると良いと思っています。

松田祥子
(ボランティア)

宇宙の4Dシアター

●2018年7月20日、10月20日

体験型展示プログラム「宇宙の4Dシアター」公演をカルチャーナイトの7月20日および10月20日に開催しました。「中国は擬人化がお好き」と題した7月公演は、ミュージアムマイスター学生参加プロジェクトの長谷川健太さんをナビゲーター(解説)として実施しました。中国の南斗六星、北斗七星がそれぞれ神格化した南斗星君、北斗星君が登場し、所々に中国語も挟んだプログラムを実施し、来場者に好評な公演となりました。10月公演は「星出づる国〜日本が紡いだ宇宙の火〜」というタイトルで、同じくミュージアムマイスター学生参加プロジェクトの永井陸さんのシナリオで実施しました。この公演ではシアター来場者の反応によってストーリーが途中分岐するという、新しい試みが導入され、3回の公演ではそれぞれ違った解説が実施されました。

公演の広報や会場準備等は、総合博物館4Dシアター運営ボランティアグループのメンバー全員で実施しています。次回公演にもどうぞご期待ください。



永井さんと長谷川さんの掛け合いで進行する10月公演

山下俊介
(研究部助教/映像資料学)

2018年度
第1回ボランティア講座＆交流会

●2018年8月28日



写真:企画展示室

16グループで活動している230名の博物館ボランティアに、所属グループ以外の博物館活動にも関心を広げたり、相互交流を図っていただくため、博物館ではボランティア講座＆交流会を開催しています。

2018年度の第1回として、山下俊介助教に、担当された夏季企画展示「視ることを通して」の展示室で特別解説を行っていただきました。個々の展示物を注視することに慣れている私たちですが、資料を「視る」さまざまなアプローチを意識することを促す展示内容は新鮮に映り、山下先生の説明にボランティアの方々は熱心に聞き入っていました。また、研究者達が研究の過程で作成するさまざまな資料を残していく意義も再認識できる機会となりました。講座の後は、ミュージアムカフェぽらすの美味しいお茶をいただきながら、山下先生と参加者が歓談するひとときをもちました。

湯浅万紀子
(研究部教授/博物館教育学)

平成30年度 前期記録

平成30年4月から平成30年9月までに行われたセミナー・シンポジウム

バイオミメティクス市民セミナー
「近代国家日本とバイオミメティクス」
針山 孝彦(浜松医科大学特任教授)
下村 政嗣(千歳科学技術大学教授)
下澤 楯夫(北海道大学名誉教授)
日時:4月8日(日) 13:30〜15:30
参加者:73名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「明らかな減少・劣化を示す高山植生について何ができるか〜アポイ岳の場合〜」
佐藤 謙(北海道大学総合博物館資料部研究員)
日時:4月14日(土) 13:30〜15:00
参加者:100名

バイオミメティクス市民セミナー
「北海道とバイオミメティクスを考える その1
バイオミメティクスの動向」
大原 昌宏(北海道大学総合博物館教授)
居城 邦治(北海道大学電子科学研究所教授)
日時:5月5日(日) 13:30〜15:30
参加者:66名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「ウズベキスタンの慣習経済
—計画経済と市場経済の間で—」
樋渡 雅人(北海道大学大学院経済学研究院准教授)
日時:5月12日(土) 13:30〜15:00
参加者:60名

地質の日記念展示関連セミナー
「北海道の石! 砂白金」
中川 充(産総研北海道センター)
日時:5月13日(日) 13:30〜15:00
参加者:50名

地質の日記念展示関連セミナー
「北海道における地質学の調査・研究の
事始め〜北海道命名150年によせて〜」
松田 義章
(NPO法人北海道総合地質学研究センター)
日時:5月26日(土) 13:30〜15:00
参加者:60名

バイオミメティクス市民セミナー
「北海道とバイオミメティクスを考える その2
農業とバイオミメティクス」
貴島 祐治(北海道大学大学院農学研究院教授)
日時:6月2日(土) 13:30〜15:30
参加者:50名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「北海道のアブ」
佐々木 均(北海道大学総合博物館資料部研究員)
日時:6月9日(土) 13:30〜15:00
参加者:75名

バイオミメティクス市民セミナー
「北海道とバイオミメティクスを考える その3
寒冷地とバイオミメティクス」
深町 康
(北海道大学低温科学研究所・北極域研究センター教授)
日時:7月7日(土) 13:30〜15:30
参加者:56名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「病気を見つける薬から治す薬へ」
小川 美香子(北海道大学大学院薬学研究院教授)
日時:7月14日(土) 13:30〜15:00
参加者:80名

ミュージアムカフェ金曜ナイトセミナー
「北海道大学のみどりの効用と緑地管理」
近藤 哲也(北海道大学大学院農学研究院教授)
日時:8月3日(金) 18:30〜19:30
参加者:35名

バイオミメティクス市民セミナー
「北海道とバイオミメティクスを考える その4
デザインとバイオミメティクス」
福田 大年(札幌市立大学デザイン学部講師)
日時:8月4日(土) 13:30〜15:30
参加者:52名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「シベリア北極圏への人類の拡散」
高倉 純
(北海道大学埋蔵文化財調査センター助教・北海道大学総合博物館資料部研究員)
日時:8月11日(土) 13:30〜15:00
参加者:120名

ミュージアムカフェ金曜ナイトセミナー
「北大キャンパスの蛾類について」
櫻井 正俊(北海道大学総合博物館ボランティア)
日時:8月31日(金) 18:30〜19:30
参加者:25名

バイオミメティクス市民セミナー
「北海道とバイオミメティクスを考える その5
花、美、武士道とバイオミメティクス」
高橋 大作
(新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会)
馬場 ふさこ(映像作家)
日時:9月1日(土) 13:30〜15:30
参加者:64名

ミュージアムカフェ金曜ナイトセミナー
「"場"をつくること
—くみたて和室の開発と実践を通じて—」
小澤 丈夫(北海道大学大学院工学研究院教授)
日時:9月21日(金) 18:30〜19:30
参加者:35名

平成30年4月から平成30年9月までに行われたパラタクソノミスト養成講座

植物パラタクソノミスト養成講座(初級)
佐藤 広行
(北海道大学総合博物館資料部研究員)
日時:9月15日(土) 定員:12名
対象:大学生・一般(参加者12名)

平成30年4月から平成30年9月までの主な出来事

4月1日 河合俊郎先生 水産科学研究院へ異動
4月1日 田城文人先生 着任
4月1日 研究支援推進員 植松淳子さん着任
4月7日 宇宙の4Dシアター「火星を狙い撃て! 〜今年は火星大接近〜」開催
4月27日 地質の日記念展示「北海道のジオサイトに見る岩石」開催(〜6/17)
5月19日 文部科学省審議官一行(2名)解説
5月30日 文部科学省高等局視学官一行(2名)解説
5月31日 文部科学省研究振興局学術機関課帳補佐一行(3名)解説
6月14日 文部科学省研究振興局参事官一行(2名)解説
6月17日 ポプラチェンバロコンサート「新緑の中でのバロックの風」開催
6月21日 文部科学省大臣官房会計課長一行(7名)解説
6月22日 財務省主計局次長一行(9名)解説
6月22日 BLUEGRASSミュージアム・カフェ・ナイトコンサート 開催
6月23日 北大エコキャンパス観察会「サクシュコトニ川沿いの遺跡・花・虫」開催
6月28日 文部科学省研究振興局学術機関課長一行(2名)解説
7月6日 文部科学省学術研究助成課一行(2名)解説
7月6日 BLUEGRASSミュージアム・カフェ・ナイトコンサート 開催
7月20日 カルチャーナイト2018「星空とチェンバロのタベ」開催
7月27日 夏のナイトコンサート 開催
8月3日 サハリン州郷土博物館一行(2名)解説
8月3日 夏季企画展示「視ることを通して」開催(〜10/28)
8月7日 文部科学省審議官一行(2名)解説
8月10日 ナイトコンサート「邦楽の夕べ」開催
8月24日 ポプラチェンバロ・コンサート「月夜に愉しむトークと音楽」開催
8月25日 企画展展示解説ツアー 開催
8月31日 トークイベント「学術資料を用いた表現行為の可能性」開催
9月6日 北海道胆振東部地震による臨時休館(〜9/14)
9月15日 北海道胆振東部地震による開館時間短縮(〜9/21)
9月15日 文部科学省大臣官房会計課係長他一行(8名)解説
9月19日 企画展特別上映週間(〜9/24)
9月29日 企画展展示解説ツアー 開催

入館者数(平成30年4月〜平成30年9月)

	入館者数	見学団体数	解説の件数	企画展示(略称)
4月	14,887	6	0	シマエナガさんの12ヶ月(〜4/15) 北海道のジオサイトに見る岩石(4/27〜)
5月	17,247	14	6	北海道のジオサイトに見る岩石
6月	27,427	43	13	北海道のジオサイトに見る岩石(〜6/17)
7月	20,101	40	16	
8月	37,286	28	7	視ることを通して(8/3〜)
9月	13,872	27	5	視ることを通して

お礼

以下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備等でご協力いただきました。謹んでお礼申し上げます。
（平成30年4月1日～平成30年9月30日）

（敬称略）

◉植物標本
石田愛子, 岩城瑞恵, 蝦名順子, 大原和広, 加藤康子, 桂田泰惠, 加藤典明, 金上由紀, 菊地敦司, 児玉 諭, 駒谷久子, 坂上美裕己, 嶋崎太郎, 須田 節, 高岡さくら, 髙橋美智子, 田端邦子, 中川博之, 林 裕子, 藤田 玲, 船迫吉江, 星野フサ, 細川音治, 本多丘人, 松本珠季, 目黒嘉子, 吉中弘介, 與那覇モト子, 和久井彬実

◉菌類標本
石田多香子, 鈴木順子, 谷岡みどり, 外山知子, 星野フサ, 村上さつき

◉昆虫標本
青山慎一, 伊藤優衣, 梅田邦子, 柏崎 昭, 川田光政, 喜多尾利枝子, 黒田 哲, 斉藤光信, 櫻井正俊, 佐藤國男, 佐藤拓海, 志津木眞理子, 諏訪正明, 高橋誠一, 問田高宏, 永山 修, 伴 光哲, 古田未央, 細川真里栄, 松本侑三, 村田真樹子, 山本ひとみ, 芳田琢磨, 吉野優希

◉考古学
青山美桜, 安 翔宇, 荒谷 博, 池澤 泉, 稲田薫, 井宮淳恵, 江口暁彦, 遠藤 優, 翁 哲毅, 太田 晶, 大泰司紀之, 奥山杏南, 神田いずみ, 木内和秀, 木村則子, 木村映陽, 斉藤理恵子, 榊山 匠, 佐々木征一, 岸谷美恵, 謝 倩氷, 末永義圓, 鈴木 花, ソンチャロエンチャイキットチョラウィット, 武田真緒, 田中公教, 田中望羽, 玉熊優菜, 成田千恵子, 二瓶寿信, 濱崎瑠菜, 林和花奈, 久井貴世, 平井麻理亜, 水澤こと, 宮崎真結, 森本智郎, 山本晶絵, 渡辺双葉

◉メディア
伊藤優衣, 鈴木里奈, 卓 彦伶, 武田満希, 藤井真知子, 三嶋 渉, 山田大隆, 山本ひとみ

◉化石
朝見寿恵, 荒山和子, 安 翔宇, 飯島正也, 池上森, 石崎幹男, 泉 駆, 市橋晃弥, 糸井容子, 今井久益, 臼田みゆき, 宇津城遥平, 太田 晶, 大宮 伶, 大村 颯, 小笠原玄記, 岡野忠雄, 尾崎美雪, 尾上洋子, 金内寿美, 川又いづみ, 木村聖子, 木村映陽, 木村衛朋, 國廣亜矢子, 久保孝太, 近藤知子, 近藤弘子, 齊藤優里, 酒井光希, 酒井 実, 榊山 匠, 佐藤健一, 岸谷美恵, 清水洲平, 高崎竜司, 武田満希, 田中公教, 田中望羽, 千葉謙太郎, 寺田美矢子, 寺西育代, 寺西辰郎, 中田悦子, 長瀬のぞみ, 長野あかね, 八丁目清之, 八丁目文枝, 福田祐生, 福地亮介, 本村美奈子, 前田大智, 三嶋一輝, 森 淑子, 守屋友一朗, 山内静香, 山角美夏, 山下暁子, 山田佐穂

◉北大の歴史展示
寺西辰郎

◉展示解説
在田一則, 石黒弘子, 植松琉以, 太田 晶, 生越昭裕, 河本恵子, 菅 妙子, 雲中 慧, 笹谷幸恵, 高崎竜司, 田中公教, 田中望羽, 千葉謙太郎, 塚田則生, 手島 駿, 寺西辰郎, 成田敦史, 西川笙子, 濱市宗一, 濱崎瑠菜, 松田義章, 村上龍子, 森 淑子, 山崎敏晴, ロバート・クルツ

◉翻訳
ロバート・クルツ

◉平成遠友夜学校
遠藤大輔, 大山圭也, 柿本恵美, 城下洽子, 須田 力, 田中敏夫, 辻本丈登, 中井玉仙, 沼田勇美, 牧野小枝子, 増田文子, 松田大徳, 山岸博子

◉4Dシアター
石神早希, 佐薙伽奈, 田中裕子, 塚田則生, 徳丸沙耶夏, 沼田勇美, 平田栄夫, 福澄孝博, 牧野小枝子, 増田文子, 三和優吾, 山上智子, 渡辺真理子

◉ポプラチェンバロ
石川惠子, 小野敏史, 新林俊哉, 髙橋芙悠, 永野遼太, 新妻美紀, 野村さおり, 松田祥子, 雪田理菜子, 横倉伶奈

◉図書
岡西滋子, 今野成捷, 須藤和子, 髙木和恵, 田端邦子, 中井稚佳子, 沼田勇美, 久末進一, 鮒田久意, 星野フサ, 本名百合子, 宮本昌子, 村上龍子, 山田大隆,

◉第2農場
石田多香子, 稲場良雄, 宇井康子, 大沼良文, 大山圭也, 木村幸司, 甲本勝嗣, 城下洽子, 高井宗宏, 辻 孝太, 辻本丈登, 寺西辰郎, 橋爪俊明, 渡部典子, 渡邊雄之介

◉ハンズオン
梅野智貴, 加藤典明, 佐藤蓮花, 嶋野月江, 須藤和子, 徳丸沙耶夏, 仲谷優輝, 濱崎瑠菜, 福澄孝博, 山岸博子

◉展示制作支援
在田一則, 大槻淳子, 佐藤健一, 佐藤 豪, 清水光希, 鈴木 花, 塚田則生, 寺西辰郎, 松田義章, 三嶋 渉, 横倉伶奈

◉きたみてガーデン
片岡奈々, 近藤 縁, 佐藤百栞, 駄場優子, 玉田聖司, 土屋憧真, 濤岡 優, 星野愛花里

◉水産科学館
木村克也, 馮 婕, 李 柾顥, 岸本早貴, 高橋雄大, 千田哲朗, 能登雄大, 東 大聖, 古庄 誠, 三田昴平, 三宅和志, 横山敢紀, 吉岡ほの香, 小幡光汰, 樋口淳也, 岡本大輝, 戸叶太朗, 深井佑多佳, 朴 ソダム

［表紙写真］ 夏季企画展示「見ることを通して」にて展示されたOtto Himmler社製顕微鏡

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM 北海道大学総合博物館

北海道大学総合博物館ニュース 第38号
編　集：山本順司・谷地中大介・朝野麻衣
発行日：2019年（平成31年）1月31日
発行者：中川光弘

発行所：北海道大学総合博物館
所在地：060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
E-mail：museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp
http://www.museum.hokudai.ac.jp/

デザイン・印刷
畠山尚デザイン制作室